

トポスにおける発達

第 7 回

身体性の変容——運動会におけるからだの意味

無 藤 隆

子どもの活動として、体を動かして遊ぶことはもちろん大きなウェイトを占めている。それは同時に、トポスとしての問題でもある。園の環境を見直したとき、子どもが運動している様子が目に付くが、それは子どもがその空間を利用している姿でもあり、また、子ども同士の関係が体の動きがともに作り出す関係を形成している様子でもある。

普段の遊びでも体をもろろん常に動かしているのであるが、運動が主な目的になっている遊びがその中にある。三輪車・自転車に乗ることや、ブランコ・滑り台などの遊具の利用、単なる駆けっこなどがあり、また、サッカーやドッジボールなどのスポーツも正規のルールではないにせよしばしば行われている。それは単に体を動かすのみならず、環境にあるものに関わり、空間を独自の形に変容させ、また、一緒の遊びをする仲間との独特の関係を成り立たせ、その遊びに入っていない仲間と区別する関係を作る。

逆に、トポスの関係の側から言えば、ある種の運動を可能にし、しやすくする空間のあり方があり、その元で、運動とそこでの関係が成り立つ。それは保育の問題として言えば、いかなる空間を成り立たせ、いかなる運動と関係を可能にするのか、それがどのような方向へと変貌することが望ましいのかを論じるべきだということである。

日常の遊びのみならず、運動会などの行事はとりわけ独特の空間・関係・運動のあり方を構成する。運動会は、多くの園では保育の成果を親に公開する機会であり、子どもの目当てとして立てることで集中した努力を促すときであり、また、異年齢の交流を可能にする場ともなる。晴れやかな楽しみの場としての行事の意味ももちろんある。だが、そのための練習が行き過ぎ、日常の保育を阻害することも「行事保育」としてしばしば指摘され、いかにして普段の遊びの延長線上に運動会を構成するかも工夫されている。

本稿では、運動会での運動のあり方を「リレー」の練習の姿の検討から考えてみたい。だが、そのことに行く前に、運動会の発生の歴史から学び、そこでの現代での意味を再考しておこう。

運動会の思想——歴史的検討から

社会学・政治学の研究者である吉見（吉見俊哉「運動会の思想——明治日本と祝祭文化」思想、一九九四、十一月、P. 137—162）は、日本の学校における運動会の発生を近代日本の国民国家成立の過程での教育的展開の中に求めて分析している。ここで、その要点を紹介しながら、特に現代の幼稚園での運動会のあり方に示唆を与える点を抜き出そう。運動会はいつ頃から小学校の行事として成立したのだろうか。「運動会」と呼ばれるものは、明治十八年頃に誕生し、数年で全国の学校に普及したと言えう。しかし、この初期の運動会は、そもそも行われる場所が学校から離れたところであって、まだ「遠

足」や「行軍」と区別できないものだった。これは江戸時代から物見遊山の延長という面もあったが、同時に、軍隊の行事や演習の側面も持っていた。目的地に至るまでの行軍を重視していたし、さらに、競技自体が、運動競技というより軍事演習的な色彩を強く帯びていた。

こうした普及の制度的思想的前提を作ったのが、明治十八年に文相になった森有礼であるという。森は「国家論的な観点から児童の身体の規律・訓練化を強力に進めた」(P. 142)。森は、「一方で、この国の子どもたちが近代的な身体技術を獲得した主体へと残らず調教されていかなければならないと考え、他方で、そうした主体の能力が天皇を頂点とする国家的な共同性のなかに一元的に収斂されていかなければならないと考えていた。そして、これら二つの相互に運動する国民Ⅱ国家的な身体工学が試され、作動させられる理念的な装置として学校を捉えていたのだ」(P. 143)。

明治二〇年代半ば以降になると、新たな変化が生じてくる。それは、競技の内容種目が増加し、特に、球技や徒競争といった現代でも行われているものが出てきたことである。個人単位で運動能力を比較する競争種目が増大したことが注目される。「明治三〇年代以降、運動会のなかでの競争種目の増加により、運動会が、参加する児童各人にとって自らの技能が衆目のなかで可視化されていく機会として経験されていくことになる。運動会はしだいに、『遠足』や『模擬戦』という以上に『試験』にも似た性格を帯び始めるのである」(P. 149)。平等な条件で競い合うことによって、各自の力の度合いが見られることになる。それは、平素の教育訓練の成果を示す機会として擁護される。

そのことから、「そうした競技が行われる空間が児童の「精密なる観察」を容易ならしめるように整備されていく必要があった」(P. 149-150)。実際、明治四〇年以降、運動会が開かれる場所が学校内の

運動場でなされるようになったという。運動会から行軍的な要素が消え、移動の時間を多種目を実施することに使えるようになったことに加え、「運動場」という区画化された領域において、集合した児童たちの身体技能は、以前よりもはるかに容易に可視化され、測定されていくことができるようになったのである」(P. 150)。

個人の競争を奨励することは教育的に好ましくない問題も生む。そのジレンマを解決するための工夫として出てきたのが、見ている子どもが応援を行うことや、「各々の競争を当事者だけの競争とするのではなく、より大きな集団間の戦いとして示していく工夫を施す」(P. 152) ことなのである。個々人の運動技能の提示や競争と、その集合としての団体の対抗意識をもち立てての競争が一体のものとして結びつけられた。

しかし、運動会は、単に身体訓練とその成果の提示・競争のためだけにあったのではない。もう一つ

の大事な要素が村の祭としても機能していたということである。運動会は当初からその地域の多くの住民が見物に訪れていた。児童と村人が一緒になって楽しむ祭りでもあったのである。その祭りの傾向は、大正期にはいっそう顕著になったという。学校の祭典であり、町村の祭りであった。ここで注目できるのが、明治三〇年代以降、学校の行事が地域の年中行事としても重視されるようになったことである。それは、伝統的民族な祭りを学校のなかに、そしてそれを通して国家の時間のなかに組み入れることである。その過程において、「児童一人ひとりの、そしてまた国民一人ひとりの身体を再構成してきたのである」(P. 158)。

以上の吉見の論考の整理から明らかに、近代日本国家の



成立において、学校制度が子どもの身体のあり方までも規定し、また同時に地域での祭りを学校ひいては国家の中に組織化するものでもあった。運動会とはそのような大きな近代の流れのなかの一コマである。この議論が現代の学校の運動会に対して何を示唆するかは、もちろんまた別のことである。歴史的な由来は必ずしも現代でのその機能を示すものではないからである。しかし、現代のあり方を見る上で有力な視点を提供しているであろう。

はじめに述べたように、現代の学校の運動会は、日頃の教育の成果を示すと同時に、親や地域の住民を交えた祭りでもある。子どもの集団的な競争があるが、同時に普通は個人毎の競争もある。独自の身体的な動きを要求するものでもあろう。行われる場所は大概、運動場である。程度の差はあれ、このような小中学校での運動会の特徴は多くの幼稚園でそれに当てはまらないわけではない。だが、同時に、幼稚園では、多くの場合に、競争的な要素を和

らげ、遊びとしての要素を強調するだろう。次に一つの事例でその様相を検討してみたい。

ある幼稚園でのリレーの様子

次に示すのはある東京の幼稚園での運動会のためのリレーの練習やリレー遊びの様子である。すべて私が観察メモを取ったものである。紙幅の関係で、事例の要点のみ示す。

五歳児がリレーの練習をする。運動場に両側が丸く間に二本直線が引いてある。スタートゴールに走路を区切って線が引いてある。真ん中には線が二本引いてあり、赤と白が分かれて並ぶ。二か所の角にはコーンポストが置いてある。赤と白が棒を渡し、リレーをする。

子どもが次々に一周する。子どもによっては線の内側を走る。保育者と学生が角に立って、応援する。続けて、同じ子どもが繰り返し走る。そこで、保育者が終わらせる。

次のリレーでは、保育者が「一番最後の人」に色の紐をつけ、「ゴールしたらおしまい」とする。角に立った保育者が中に入ろうとする子どもを制止して外を走らせる。途中で中に入った子が二人いる。赤が先にゴール。白のアンカーは内側を走ったので、保育者がやり直させ、皆が応援する。

さらに練習した後全体は解散し、子どもたちの内十数名がリレーをする。保育者も一人ついている。内側を走る子どももいるが、他の子どもはあまり見えない。保育者が一度やり直させる。その後は、内側を大体走る。アンカーがいないので、次々に後ろに並んで走っている。一人の子が内側に大幅に入って走った後、「ズルする」と一人の子から非難がある。遅れ過ぎると、次の番の子とともに走る場合すらある。

これらの事例で、特徴的なことは、二人の対になって走る子ども同士であまり差がつかないことである。どうしてであろうか。一つには、足の速い子

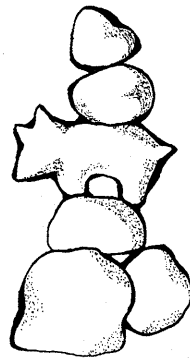
と遅い子とが適宜入り交じっている。そもそも走る距離が短い。また、差がつきだすと遅れた子は必死で走っている。前の子を目標にしているようである。それに対して前の子は時折後ろを振り返ることが多いので、遅くなる。立ち止まって見ている子すらいる。遅れた子は内側を走って近道をする。近道はよほど大幅でない限り気づかれない、あるいは文句を言われない。バトンを受け渡すときにもたつく。これは前の子どもの場合の方が二人待っている問題になりやすい。以上から、子どもにとっては、リレーは集団の競争である以上に、たまたま対になった相手との一対一の競争であるように思える。

子どもたちが自分たちでリレーを遊んでいる場合、アンカーを決めたりしない。そもそも二組を同じ人数にもしていない。次々に並んで繰り返し走っている。集団としての競い合いが成り立っていない。保育者が組織化しない限り、子どもたち自身の

遊びとしては、一対一でどちらが速いかを競っている。それも、あまり離れることなく、具体的に追いついたり、追い抜いたりすることが重要なようである（ただし、一方的に走っていく子どももいる）。

この後の運動会が近づいてきた頃の練習では、保育者がかかり立ち入ったの指導を行っている。赤と白の組の対応する子どもをつないで並ぶ。後ろにいる子で対応する子どもがいないことを保育者が指摘し、初めに走った子どもが後に回りもう一度走るように指導し、最後に走る子どもを確認する。角に保育者二人と学生一人が立つ。走り始めると、見ている子どもは先生とともに応援する。次々に子どもは対で出て、バトンを受け取る。内側を走る子どもは一人だけいる。わずかの差で白が勝つ。保育者が白の勝ちを確認し、白が喜ぶ。この後の練習でさらに繰り返し、またバトンの持ち方・渡し方なども指導している。

ここでは、対の組み合わせがはっきりさせられ、



対の間の競争だということが強調されている。同時に、人数がそろえられ、走路をはみ出さないように監督され、集団の間の勝敗が明確にされる。

だが、その後の十数名のリレー遊びでは、子どもたちが自主的に競争し、エンドレスに続けて、保育者が終えさせるまで行われる。子どもの対の対応は

はっきりしないが、走り出すと、一人が前を走っている子どもに追いつこうと懸命に走り、前を走っている子どもが速度を緩め、またそれを見ている子どもが追いつく際には注目することが見られる。

なお、集まりの時間で保育者が、リレーのルールとして、バトンをちゃんと渡すこと、オレンジの線の外側を走ることを確認している。

本番の運動会では、親が見に来ており、また園長、と若干の来賓がいる。入場と歌・踊り、玉当て、障害物競争、忍者などの演技、リレー、綱引きなどが行われ、白と赤で競った。リレーは赤と白の子が対になって順に走り、きわめて接戦でアンカーが入り、白が二回とも勝った。

なお、運動会の後、四歳児十数名がリレーごっこをしている様子を見ることが出来た。保育者が一人入っている。ときどき内側を走る子がいるが、ほとんど文句は出ない。前を行く子どもは途中で後ろを見て、時に足を緩めていた。半周ほど差が付く場

合、後の子が内側を走るなどして大概追いつく。二人が近づいて競り合うと、待っている子はよく見ると、しかし、離れてしまうと、時に後の子が追いつこうとしない場合もある。一人の子が一度半分くらいを近道したとき、子どもが不満を言い、保育者も注意をして、後から問題として取り上げ、線の外を走るやり方を示した。また、途中で、保育者が子どもの対をつくるように指導して、最後の子どもを確認して走ること最後にしていた。

以上から、子どもが自主的に遊ぶときは、ただ走ることや二人同士が追いつき追いつくことが焦点になっっているようだ。対での競争は保育者も指導するが、子どもたちもそうする。だが、子どもの自主的なやり方は前もって対を決めるのでなく、走り始めたときにも近いところで走っている子どもを相手と定めるようである。そこで成り立つ関わりは、身体的動作であり、身体的動作の個々人の間の協応である。集団としての勝敗は意識されない。そもそも

も勝敗を決める手順が実行されない。

保育者が導入し、維持を図っていることは、リレーの集団的な競技としての成立である。順に走ること、アンカーを決め、勝敗がはっきりすること、走路を走るのを守ること（内側を走るのは遊びなら要領がよいことや工夫かもしれないが、ここでは「ずるい」とされる）、見る側の子どもはちゃんと見ているだけでなく応援すること、などである。

だが、そこで重要なことは、そのルールが保育者の援助（および引かれた線、コーンポスト、角に立つ大人などの支え）により維持されつつも、なおかつ、微妙な違反が許容され、また、先を走る子が後ろを見たり、後を走る子が走る勢いを強めたりするところにある。そこに、走る遊びとしての要素が集団的なスポーツとしての形に組み入れられ変貌していく様子を見ることが出来るからである。

それは、単にピアジェ以来発達心理学で言われている集団的なルールに子どもが従うことが出来るよ

うになる変化にとどまらない。その発達の变化はさらに具体的な動きのレベルでは、実は、身体像の変貌であり、身体が結ぶ関係の変貌でもあろう。身体間の動きの直接的な関係から、特定の与えられた形の中に自らの身体の動きを入れ込み、そしてその制約の元で力を発揮することへの変化であり、またその形を見、見られるものとして洗練させていく方向への一歩なのである。同時に、遊びの空間から身体スポーツの均質的な空間への変化でもある。

幼児期の運動会に代表されるような動きの変貌の萌芽は、現代の幼稚園において、集団的なスポーツでの身体像への変化を表している。だが、同時に、遊び的な身体の可能性を保持することにより、その変化を根底において活性化していると見なせるのではなからうか。

（お茶の水女子大学）